

森本 淳著

『三国軍制と長沙呉簡』

汲古書院 二〇一二年・一一刊

A5 二九〇頁 七〇〇〇円

著者の森本氏は、後漢末期から西晋初期の軍制史、とくに漢魏交替から魏晋交替へと至る間の軍制・軍官の役割とその変遷を主たる研究課題としてきたが、二〇〇九年に急逝した。本書は、著者の知友による論稿の整理・再構成を経て成ったものである。全体は三部構成で、軍制にかかわる第一部・第二部にはそれぞれ五篇・三篇の論稿を収めるほか、第三部には一九九六年に湖南省長沙市で出土した孫呉時代の簡牘いわゆる長沙呉簡に関する論稿二篇と調査報告一篇を収める。以下、本書の論点を簡潔に紹介する。

まず第一部「曹魏軍制論」では、曹操軍団の形成過程を分析するとともに、曹魏王朝崩壊の背景を都督制の変遷から論じる。具体的には、曹魏初期の都督は曹操時代の状況を反映して帝室武人官僚により占められたが、人材不足によりその維持がしだいに困難となり、明帝期を境に行政官僚昇進の一過程へと変化したことを述べる。そして、その後の都督区の分割により都督の権限が狭められるとともに、都督と中級指揮官との関係も希薄となり、それが魏晋革命の実現へと結びついたと結論する。

続く第二部「漢晋間の軍制と地域社会」では、第一部で描いた曹魏王朝の全体像を踏まえて地域に眼を転じる。特に後漢末から西晋にかけての時期における涼州・雍州が強い独立性を有し、当

地の有力者層が州牧或いは都督との間に協力関係を築き上げることで、王朝の支配体制との間に妥協点を見いだしながら、地域の安定化を企図したことを論じる。

最後の第三部「長沙呉簡研究」では、耕地の占有状況や下級軍事制度の実態を明らかにするために、人名や官名の視点から長沙呉簡中に見える関連情報の基礎的な整理、分析を行う。また、著者が二〇〇三年一月に長沙市で行った該簡牘の実見調査と関連機関への訪問の記録もここに収める。

さて、これまでわが国では三国軍制と長沙呉簡を正面から扱った研究書はなく、本書は両分野において初の専著となる。曹魏時代の軍制の変遷と運用の実際が概観されたことと、軍事力を背景に成立した曹魏王朝の政治的特質を明らかにした点に本書の最大の価値があることは、衆目の一致するところであろう。また、著者は日本において最も早く長沙呉簡研究に着手した研究者の一人であり、その成果がこのようにまとめられたことには一定の意義がある。

ただ、本書の後記で編者も述べる如く、第二部において見られる著者の地域研究への視角は、本来その後も継続されたはずであると推察され、その果実を享受しえないことは誠に遺憾である。とはいえ、本書において著者が提示した歴史像が、三国時代史だけでなく、広く秦漢魏晋南北朝時代史研究においても重要な位置を占めるであろうことは言うまでもない。該時代史及び軍制史研究を志す者にとって、味読すべき一書である。(大原信正)